

# ZOCALO 2023 2 ▶ 3

ZOCALO=ソカロはメキシコの都市の広場を意味するスペイン語。埼玉県立近代美術館はアートを通して交流する市民の広場をめざしています。

## 彫刻をめぐる「彫刻」

企画展「戸谷成雄 彫刻」  
2023年2月25日(土)～5月14日(日)



1



2



3



4

戸谷成雄(1947年～)は1970年代より彫刻家として活動をはじめ、1980年代中頃から木材の表面をチェーンソーで彫り刻む「森」シリーズを発表しました。以降、国内外で高い評価を受け、後続する世代の作家たちにも影響を与えるなど、日本の現代美術を代表する彫刻家として知られています。都道府県立の公立美術館としては約20年ぶりの個展となる本展は、作家の出身地である長野県と、制作拠点の埼玉県の県立美術館による共同開催となります。展覧会では2館それぞれに異なるコンセプトを設け、学生時代から現在に至るまでの戸谷の実践を幅広くカバーすることを目指しました。ここでは当館の展覧会の特徴をご紹介します。

当館では「森」シリーズ以降の戸谷の代表作を網羅するとともに、学生時代から「森」に至るまでの初期の作品群に焦点を当て、大まかに3つのコーナーに分けて展覧会を構成しました。最初のコーナーでは大学在学中から、初個展までの作品を展示しています。1969年に愛知県立芸術大学に進学した戸谷は、マイヨールに師事した彫刻家・山本豊市のもとで西洋近代彫刻の基礎を学びました。今回出品される人体彫刻は、ベトナム反戦運動や学園闘争などが活発化した当時の日本社会のなかで、戸谷が無力感を抱えながら創作の方向性を模索する過程で生み出されました。大学卒業以降、初公開となる卒業制作の人体彫刻2点(《男Ⅰ 斜面の男》《器Ⅲ》)をまとめて見られるのも、埼玉会場の見どころのひとつです。

戸谷が作家活動をはじめた1970年代前半は、絵画や彫刻といった美術の既存の枠組みが批判や解体にさら

されていた時期でした。戸谷自身、ミニマリズムやアルテ・ポーヴェラ、もの派など同時代の美術動向から強い影響を受ける一方で、彫刻というジャンルが否定されることによって、アート(美術/技術)そのものがこの世からなくなってしまうのではないかと危機感を抱いていました。初個展で発表された《POMPEII・79 Part1》は、その後の制作を方向付ける重要な作例です。本作は、西暦79年にイタリアの古代都市・ポンペイにあるベスビオ山で噴火が起きた際に市民の死体が火山灰のなかで気化し、十数世紀後の調査で、その空洞に注ぎ込まれた石膏によって人型が再び出現したエピソードに着想を得ています。ポンペイに関する一連の出来事には、ポジとネガ、実体と空間といった彫刻にまつわる概念が凝縮されており、1974年の時点で、戸谷がそういった二項対立の狭間から再び彫刻を始動させようとしていたことがわかります。

次のコーナーでは、代表作「森」「地霊」シリーズに至るまでの1970年代末から1980年代前半の作品変遷をたどります。この時期に制作された作品は素材、形態ともに多岐にわたり、まさに模索期として位置付けることができます。彫刻という概念を持ち出すこと自体が憚られていた当時の強い磁場のなかで、戸谷は「彫刻」「彫る」「構成」といった彫刻にまつわる概念を二重括弧(《 》)で括弧することによって相対化し、彫刻を自らの掌に戻そうと格闘しました。本展ではこの時期に制作された「《彫る》から」「《構成》から」を出品し、彫刻を成立させる素材と形態の関係性や、彫る行為そのものをコンセプチュア

ルに捉え直そうとした試みを紹介します。

1983年、海岸沿いで過去の作品の一部を燃やしたパフォーマンスによって、戸谷は再び大きな転換点を迎えました。このパフォーマンスをもとに制作された「地下の部屋」シリーズは、変化に富む有機的なフォルムと、ピンクや緑などの鮮やかな色彩によって、戸谷成雄の作品群のなかでも異彩を放っています。埼玉会場では、パフォーマンスの映像記録とともに、「地下の部屋」の作品を約40年ぶりに出品しています。本シリーズは非常に短命でしたが、戸谷が再びイメージを向き合うきっかけとなった記念碑的作品です。

最後のコーナーでは、1990年代から2000年代にかけて制作された「《境界》から」「ミニマルバロック」「洞穴体」シリーズ、そして最新シリーズ「視線体」が一堂に会します。古今東西の彫刻表現への洞察を起点に、自己と他者、内部と外部、日本と西欧など異なる概念の相克を捉えた数々の実践は、複雑な造形と、そこに刻まれた無数の襲をとおして、「彫刻とはなにか」という根源的な問いを私たちに投げかけています。一般的に、戸谷成雄は戦後の日本美術史において「解体された彫刻」を「再構築」した彫刻家であると定義されますが、これまで実作品をもとにその過程を検証する機会はありませんでした。本展は、戸谷成雄の半世紀にわたる精力的な活動を振り返り、彫刻史や美術理論、現代思想など幅広い分野の知見に裏打ちされた深奥なコンセプトに触れる機会となることでしょう。(S.S.)



5



6



7